課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学　籍　番　号	18DC1504
氏名（本籍）	劉　偉（中国）
学位の種類	博士（学術）
報　告　番　号	甲 第 125 号
学位授与年月日	2023（令和 5）年３月 20 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
論　文　題　目	現代青島における茶文化の導入:「現地化」プロセスの研究
審　査　委　員	主査　唐　燕霞
	副査　金　湛
	副査　松岡　正子
	副査　周　星

2023（令和５）年２月 14 日
愛知大学大学院中国研究科

審 査 の 結 果 の 要 旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、劉偉より提出された課程博士論文、博士の学位授与申請書および参考関連論文等関係資料により、2022 年 10 月 28 日に予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第 7 条の定めにより、以下の 2 項目について、審査委員の意見交換を行った。

(1)学位申請論文の予備審査および履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できるという結論に至った。

(2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果、博士学位論文の基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。2023 年 1 月 26 日午後、名古屋校舎研究棟 406 教室で、対面プラスハイフレックスの形で、学位申請論文の本審査を順調に行った。

まず、劉偉より、学位申請論文の問題意識、研究目的、先行研究、フィールドワーク、キーワード、資料・データ及び論文の構成、本研究の斬新性や問題点などについて、簡潔に陳述がなされた。次に、審査委員による口頭試問に移り、質疑応答を行った。すべての質問に対し、劉偉より回答や説明がなされ、それらの答弁はいずれも審査委員全員を概ね納得させるものであった。

口頭試問が終了し、劉偉が退席した後、引き続き審査委員会において議論を重ね、以下の結論に至った。

本論文は、中国北部の都市青島を事例に、現代の「茶文化」がどのように導入され、その発展過程においてどのように再構築されたのかを実証的に考察したものであり、特に地方の都市社会における茶と住民生活の関係性を明らかにしようとしたものである。本論文の研究目的は、現代青島の「茶文化」をめぐるいくつかの事例から、青島における茶樹の導入、その「茶文化」の現地化プロセスを分析し、青島住民の日常生活に溶け込む茶の影響及び、生活に齎す変化を明らかにすることである。具体的には、青島における「南茶北引」＝茶樹の導入や栽培、生産、消費および改革開放以降、新たな「茶文化」の普及過程、例えば、品飲の慣習、茶芸教育、茶席設計などについて考察を行った。さらに、現代都市の茶人と茶会のメカニズムや、飲茶空間（茶館から茶芸館への変化）などについても明らかにした。

本論文の構成は、序論、本論と結論からなる。序論では、研究動機と問題意識、研究目的と研究

意義、先行研究、理論の視点、現地調査の記録、論文構成及び基本内容をまとめる。

第一章では、調査地である青島の都市の歴史、地理及び飲み物に関連する文化を整理し、「南茶北引」以前の青島の茶の飲用状況を把握した。

第二章では、「南茶北引」について考察し、その過程について論じた。本論文で言及する「南茶北引」には、二つの意味がある。一つは茶の栽培の着地であり、主に嶗山茶の栽培、販売をめぐる人間関係が茶の生産に与えた影響や、嶗山茶の価値がどのように生産されたのかを論じる。二つ目は、新たな販売、飲茶方式の伝来による、それらの現地化である。

第三章では、現代の「茶文化」の発展とともに、茶芸師という職業が広く認知される中で、近年展開されている茶芸師、評茶師の教育について取り上げ、その「茶文化」の青島での普及過程を述べた。具体的には、青島の各茶芸培訓（教育）学校、茶博会や茶会の現場で、特に茶芸を習いにやって来る人々とそれを教える先生たちにインタビュー調査を行い、青島の住民にとって茶芸を習う目的、茶芸教育の内容の構築、その茶席設計の過程及びメカニズムについて考察した。

第四章では、茶人と茶会参加者の行為を分析し、都市社会における茶会の意味と、茶会と市民生活の関係性を明らかにした。さらに、茶人が茶会により人間関係を作るメカニズムを考察した。

第五章では、青島における公共空間である茶館、茶芸館という空間の消費に注目し、市民のライフスタイル及び公共空間の利用状況、消費意識の変化などを通じて、住民の飲茶空間消費をめぐる諸問題を考察した。茶館、茶芸館空間の変遷過程を通じて、新中産階層の茶の需要と消費意識を考察した。青島では、飲茶空間は茶館（ゲーム室）から茶芸館（清飲）へと変遷し、市民にとって、これは公共空間の性質、あるいは新たな公共空間の利用方式が認識される過程であり、新たな空間消費方式の形成過程でもある。

最後に、これまで論じてきたことをまとめ、また、残された問題、課題などについて検討した。

著者は現代「茶文化」の新興地域といえる青島をフィールドに調査を行うことで、研究の空白地域を埋めることができた。また、「生活革命」の視点から青島での現代「茶文化」の導入と現地化の過程について考察し、いくつかの重要な結論に繋げた。

まず、青島は茶の消費地から生産地へと発展し、また、「外来」の販売、品茶方式を受け入れ、それらが定着・普及し、新たな「茶文化」として明確に「無い」から「有り」へと変化した事実に基づいて、青島における現代の「茶文化」は新たに創られた文化であることを実証した。

次に、現代「茶文化」の青島における導入、普及、現地化などの諸段階を明らかにした。特に高

度経済成長とともに、市民の生活方式が一変し、茶に関する消費のニーズが以前と異なってきた。茶芸の習得、茶会への参加などにより、茶人の個人的な行為が規範され、それらが生活の中に組み込まれていき、日常生活の習慣になる。現代「茶文化」の現地化に伴い、茶は「柴米油塩醤醋茶」から「琴棋書画茶」へと進化し、その茶の日常性が弱くなり、非日常性が重視されるようになりつつある。茶人、茶会、茶芸館などはそのような社会的ニーズに応じて生まれたと言える。今日の飲茶は「品味」に変身し、茶の美味しさを求めることに留まらず、芸術品のように鑑賞し、上品な品茶方式を創造し、それにより個人的な美意識を形成しようとしている。

要するに、青島における現代「茶文化」の出現、変遷や現地化は、そこに住んでいる住民の生活状況を反映しており、1960－1970年代に飲用されていたジャスミン茶と比較すれば、明瞭な「生活革命」が起こったと言っても過言ではない。茶を通じて、特に茶芸教育、茶人、茶会および品茶という実践行為を通じて、市民のライフスタイルや生活感覚などが確かに著しく変化してきた。

本論文の問題点として、「茶文化」に関する定義について、広義と狭義に分けて説明することが必要である。また、長期に渡ってフィールドワークを行うことによって貴重な一次資料を提示したことは十分評価できるが、インフォーマントに対する記録は人間性がやや欠けている。さらに、民俗学、文化人類学、社会学の視点や理論が援用されていたが、それら間の整合性が足りないところがある。

以上を踏まえて、審査委員会においては、全員一致で、劉偉論文は従来の本質主義的な先行研究と異なり、現在の青島「茶文化」が創られた新たな都市民俗文化ではないかという結論は、現代中国の「茶文化」に関する実証かつ斬新性のある研究成果であることを認め、愛知大学大学院の博士学位授与論文の諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以　上